（様式）提出用

園番号　６３６

平成３０年度　奈良市立三碓幼稚園　研究実践概要

園 長 名　　藤次　啓順
全園児数　　　39 名

１．研究主題
「心ゆさぶる体験活動を通し、生きぬく力を育む園児の育成」

２．研究年度　　　　　　２年度

３．研究主題設定理由
核家族化となり横のつながりが希薄であったり、自然や社会の環境の変化により、メディアに頼ったりする子育ての現状が見られる。また、戸外で思いっきり体を動かしたり様々な経験、体験などができたりしにくい。子ども達は、依存心が強く、言われたことに対しては行動に移せるが、自分からは進んでするには弱さがある。前年度の課題に引き続き「ひと・もの・こと」と関われるような保育内容を工夫し、心をゆさぶり生き抜く力を育む園児の育成を目指して主題を設定した。

４．具体的な研究内容

① 研究のねらい
いろいろな「ひと・もの・こと」と関わりながら、様々な心ゆさぶる体験活動を積み重ねていく中で、生きぬく力を育む。

② 研究の重点
・幼児が心動かされる体験ができるような魅力ある環境構成や保育内容を工夫する。
・幼児のありのままの姿を受け止め、内面理解や一人一人に応じた援助の在り方を探る。
・家庭や地域、保幼小の連携を深め相互の教育力を活かせる様な体験活動を計画的に進める。

③ 活動の方法
【パン屋さんをやろう！】4 歳児
作品展を経験してから、廃材でつくったものを使って遊ぶ事が増えた 12 月。一人の子どもがメロンパンをつくったのを見て、「これどうやってつくったん？」「めちゃくちゃおいしそうやん」と友達が集まった。自分もつくりたいと思ったが、同じ材料がもうないことに気づき、それぞれが他のいろいろな材料でつくれないか考えはじめた。「先生見て、こんなパンつくった。」とできたパンを見せる子どもに、「美味しそう、これは何パン？」と聞くと、ちょっと考えてから「チョコパン、ほらここが茶色いやろ？」と話す。だんだん出来上がったパンが増え

てくる。別の遊びをしていた子どもが、大型積み木の台の上にたくさん置いてあるパンを見て、「ちょっとこれください」とかばんを持ってきた。「あかん。それ売ってないねん。」「あ、待って。パン屋さんをやろう！」「お店ができたら呼ぶから待ってて。」と、思いついたアイデアにワクワクしながらパンを並べるお店の準備をはじめ「じゃあレジつくるわ」と、それぞれにお店にいるものを考え始めパン屋さんがオープンした。

＜反省と評価＞
　作品展の経験から自分でつくったものに愛着を持ち、つくって終わりではなくそれを使って遊ぶようになった。また 4 月の入園当初は「先生と自分」という関係が中心だったものが、「友達と自分」という関係性が増え、一人がパンをつくったことからパン屋さんまで遊びが広がった。友達のアイデアやワクワクする気持ちに共感し、真似したり一緒に遊んだりすることを楽しんだ。

【縄跳び挑戦】4 歳児
　10 月の運動会でもらった縄跳び、それぞれの楽しみ方で縄遊びの体験を重ねていき、3 学期の初めに一人が「先生見て、こんなに跳べるようになったよ。」と前跳びを跳んで見せる。それを見て「先生、ぼくも見ててね。」と集まり出した。保育者が「縄跳び挑戦カードをつくってみる？」と提案すると「じゃあ、できたらシール貼りたい。」「20 個ぐらい貼りたい」とそれぞれにルールをつくりながらやる気が湧いてきた。「ぼくはできないからやらない。」という子どももいたが、1 回目の挑戦はみんなの縄を園庭に並べて両足跳びで跳び越えていくことにすると、縄跳びはできないと言っていた子が「これでシール貼れるの？」と聞く。「貼れるよ。最後まで跳べたもんね。」と答えると喜んでシールを貼った。「2 回目の挑戦は頭の上で縄をグルグル回してヘリコプター」と言うと、縄跳びに興味がなかった子もシールが貯まるのが嬉しくなってきた。同時に前跳びや後ろ跳びをしたい子が「先生、次はなんでもいいことにしようよ。」と提案する。「じゃあ 3 回目からはなんでもいいことにしようか。」と縄跳び挑戦が始まった。

＜反省と評価＞
　縄跳びを初めて手にする子や，すでに前跳びやケンケン跳びが跳べる子、いろいろな段階の子ども達がいる中で「縄跳び挑戦」の活動を通してそれぞれ縄跳びに興味を持つことができた。どんどん記録を伸ばしていくことにワクワクする姿や「シールが貼れた！」という小さな成功体験を重ねることで自信を持てた。これからの新しい事に挑戦する意欲に繋げたい。

【船を浮かべたい】5 歳児
　水遊びが心地よくなってきた暑い日、みんなで船をつくろうと色々な材料を用意する。「水に強い材料は何かな？」と話すと「カップは大丈夫やな」「箱は？」「それはあかんな。段ボールやったらいいかも」と思いつく材料を口々に言う。「本当に強いか見てみよう」と大きなたらいに水を入れ浮かべてみるとカップやトレーなどは水に浮き「ほらやっぱり」と想像と同じだったようで嬉しそうに見ている。「次段ボールしてみよう」と浮かべるとしばらく浮いて

いたため「ほら、大丈夫や」「え？でも紙やで」とお互いの意見をぶつけている。しばらくして段ボールが沈むと「ほら、やっぱり沈んだ」「段ボールもダメやな」と話す。その後みんなで船をつくる。「これは浮かぶかな？」「これは水に強いかな？」と材料を考えながら選び、船をつくると、たらいに浮かべに行き繰り返し浮かぶかどうかを試していた。「大きな場所に浮かべたい」という思いから、プールに船を浮かべに行き「やったー浮いた」と喜びながらも自然に「動かしたい」という思いが出てきたようで、手で扇ぐ子、水をかき水流をつくって動かす子、息を吹きかける子など様々に動かし「前に進んだ」と嬉しそうに話す。その後うちわや風船などで風をつくり動かしたり、プロペラをつくりプロペラを回すと回す方向によって進み方が違うことに気付いたりしながら船を浮かべて動かすことを楽しんで遊んだ。

〈反省と評価〉

・水に浮強い材料を想像しながら一緒に試したことで、どんな材料があるのか、どんな素材なら大丈夫なのかを探究しながら考える姿に繋がった。また、水に浮かべることをイメージしながら船をつくったことで実際に水に浮かべ、浮かぶのか、また上手くいかないところはどのようにしたら上手く行くのかを試行錯誤しながらつくった。

・浮かんだ船を広い場所に浮かべたことで「動かせたい」と思う姿に繋がり、自然に体が動き、船が動くように考えながら遊んでいた。また、お互いが考えた船の動かせ方を伝え合いながら、どっちが速く動くか、どっちが遠くまで動くかなどを比べながら遊んだ。

【逃走中鬼ごっこ】5歳児

「今日も逃走中しよう」と数人が集まり逃走中鬼ごっこが始まる。しばらく遊んでいるが、ルールが曖昧でトラブルになり、「逃走中集合！」と子ども達が集まって相談する。その中で「僕もハンター（鬼）になりたい」と話す友達に「〇〇くん足遅いもん。ハンターは足が速いねん」「そんな言い方したらあかんよ」「僕は１回もハンターしてない」「みんなハンターやりたいよな」「ハンターみんなができるようにしたらいいやん」と友達に自分のの思いを伝えたり、どのようにしたら遊びが上手くいくのかを考えたりしはじめる。

「そうや！ハンターをルーレットで決めよう」と保育室に材料を探しに行き材料を探しながら「先生、丸い大きな箱と小さな箱が欲しい」と自分のイメージした箱を要求し、ペンや紙、割りばしなど必要なものを持ち外でつくりはじめる。どうしたら回るかな？と友達と考えた事を伝えあいながら、丸い大小に箱の大きい方にみんなの名前を書き、小さい箱に矢印をかき、真ん中に割りばしをさして回るように考える。「できたよ、ここに自分の名前書いて」と友達を集めると「すごい！本当に回る」「なんか面白そう」とルーレットを回しながらハンターを決め逃走中ゲームが始まる。その後、「ミッションで復活することにしよう」とミッションを自分達で考えながら、園にある縄跳び、ボール平均台などを使ってミッションをしたり「捕まった人が５人揃ったらミッションしよう」と捕まった人数を数えながらミッションをしたりして遊んだ。

<反省と評価>

・日々、遊びの話し合いなどを重ねてきたことで上手くいかないことがあると、子ども達だけでも話し合いの場をつくり解決方法を探る姿が見られるようになってきた。まだま

だ全員が自分の思いを話すことは難しいがその場に参加することで友達の思いを聞き考えるようになってきている。

・テレビで見た逃走中をやりたいと始まった遊びであるが、テレビで見た用具や材料に限界があり上手くいかなかったことで、自分達の逃走中にしようという思いに変わった。4歳児の頃から色々なものを使って遊んできたことで、園にあるものを使い自分達ができることを考えながらルールやミッションを考えた。また、作品展で「本物みたいにしたい！」とバスをつくった経験からルーレットの仕組みを考えつくった。

５．研究の成果

〇　子どもの実態や発達を見極めながら、子どもに合わせた保育内容や環境構成を工夫したことで、一人一人がそれぞれのやり方を試行錯誤し、目標に向かって繰り返し挑戦する姿が見られるようになった。そして、楽しみながら「できた！」という小さな成功体験の積み重ねが自信となり、主体的に活動する姿につながった。

〇　保育者が子どもに寄り添いながら関わり、繰り返し気持ちを受けとめることで子どもは安心してありのままの自分を表現することができた。そして、保育者との信頼関係の基礎がまわりの友達にも目を向けられるようになり、友達と一緒に遊ぶ楽しさや、協力して人とつながる喜びを感じ、意欲的に遊びを進めていた。

６．今後の課題

〇　今後も保護者や地域の方々との連携を深めながら、家庭では経験できないような「ひと・もの・こと」との出会いをとおし心揺さぶる体験活動を継続的に積み重ねていきたい。